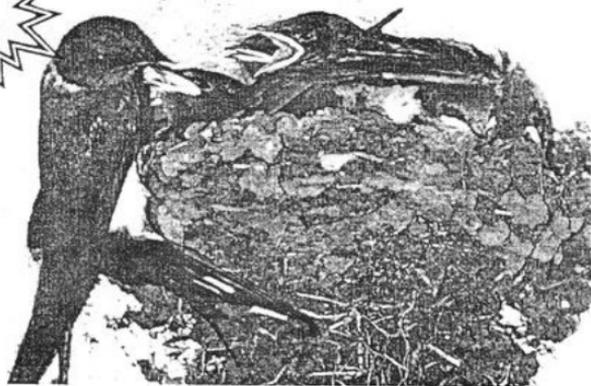


市川自然博物館

4・5月号

（通巻第4号）

だより



～ツバメ～

4月の声を聞き、市川市内でもツバメのすがたをチラホラと見かけるようになりました。ツバメは、南の国（おもに台湾やフィリピン、マレー半島の国々）から海を越えて日本にやってくる渡り鳥です。春に日本に来て、秋に帰って行きます。

日本に来たツバメは、さっそく巣づくりにとりかかります。家の軒下やマンション、駅の出入口など、市川の場合、古くからの街道沿いに多く作ります。ひなは、1ヶ月余りで一人前になります。昆虫が餌なので、ガソリンスタンドでは、そこに巣をかけたツバメが照明に集まる虫を狙って、夜飛び回るのが観察することができます。

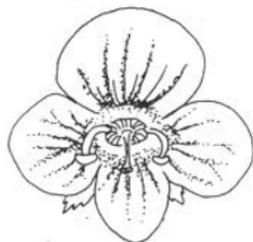
特集 春の花

『よく見れば なずな花さく 垣根かな』

これは芭蕉の句です。春の訪れとともに、私たちの身のまわりの雑草たちも、可愛らしい花を咲かせています。身近な雑草の花を観察してみましょう。

オオイヌノフグリ

春の訪れを真先に知らせてくれるのは、オオイヌノフグリです。コバルト色の美しい花です。花は平らに開き、深く4片に裂け、上の裂片が大きく、下の裂片が小さく、基部は合着して短い筒になっていて、合弁花であることがわかります。花の中央に、めしべを中にして、2本のおしべが向き合うようになっています。



オオイヌノフグリの花



ホトケノザ



ヒメオドリコソウ

ホトケノザ と ヒメオドリコソウ

畑のまわりには、ホトケノザとヒメオドリコソウが紅紫色の花をつけているのが目につきます。どちらも唇形花をしたシソ科で、同じ仲間です。春の七草のホトケノザは、キク科のコオニタビラコのこと、この種類とは別のものです。

ウォッチング

タンポポのなかま

春の花の代表は、タンポポでしょう。市川で見られるタンポポには、カントウタンポポ、セイヨウタンポポ、アカミタンポポ、シロバナタンポポなどがあります。いちばん多いのがセイヨウタンポポで、花のいちばん外側にある緑色の総苞外片（そうぼうがいひん）がそり返るのが特徴です。ヨーロッパ原産の帰化植物で、強い繁殖力で日本全土に広がっています。

アカミタンポポはセイヨウタンポポに近いもので、果実がレンガ色になります。これも外国からきた種類です。

カントウタンポポは、総苞外片がそり返りません。草原に生えますが、カントウタンポポが生えるような草原は、今では少なくなりました。シロバナタンポポは、花が白色で、全体に大形です。



ハルジオン と ヒメジョオン

道ばたやあき地など、どこにでも見られるキク科の雑草に、ハルジオンとヒメジョオンがあります。この両者はたいへんよく似ていますが、二つを見比べると、その違いがよくわかります。

- ・開花期……ハルジオンは4月から咲き始めますが、ヒメジョオンは5月下旬からです。
- ・茎……ハルジオンの茎は中空ですが、ヒメジョオンは、白色のずいで満たされています。
- ・葉……ハルジオンの葉は基部が広がって茎を抱くようになっています。ヒメジョオンは、葉の基部が次第に細くなって茎につきます。
- ・その他……ハルジオンのつぼみは、うなだれています。ヒメジョオンは越年草または一年草ですが、ハルジオンは、株が分かれて小苗をつくり、これで越冬する多年草です。



ハルジオン

市川・自然探検

～春の江戸川土手～

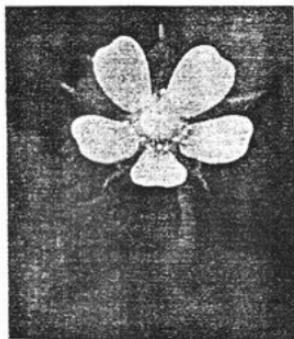
里見公園の西側、江戸川と坂川が合流するあたりには、自然状態の河川敷が奇跡的に残っています。ツクシやカントウタンポポ、ヘビイチゴ、オオイヌノフグリなどの花が土手を飾りたて、ノウルシやジロボウエンゴサクなど市内ではここにしかない花も見られます。ヨシやオギが茂る河川敷には多くの生物が住み、夏、秋の自然観察にも適しています。



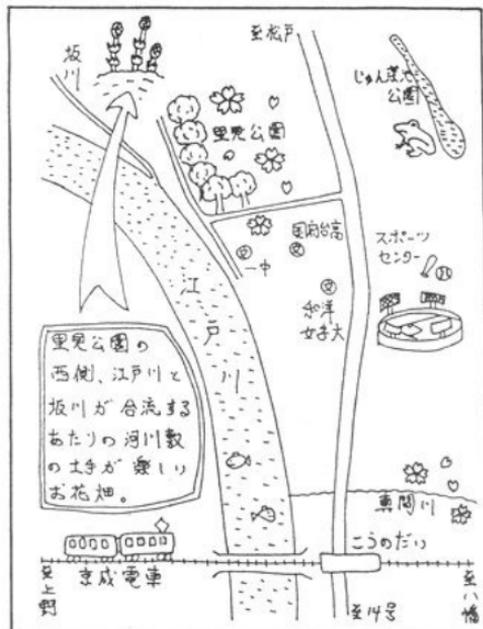
ノウルシ



カントウタンポポ



ヘビイチゴ

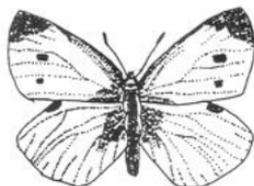


市川のこん虫



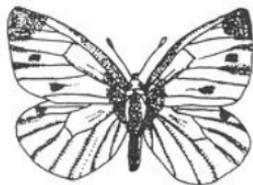
モンシロ チョウ

モンシロチョウは、誰でもその姿や名前を知っています。この‘モンシロチョウ’という名前ですが、「黒い紋（もん）のついた白いチョウ」ということでつけられました。本当にそのチョウの特徴を表現したい名前ですね。モンシロチョウは、年4回出現し、幼虫



モンシロチョウ

スジグロシロチョウ



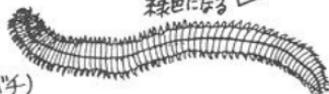
はアオムシと呼ばれ、キャベツやダイコンの葉を食べ荒らすので、農家の人から嫌われています。ところで、最近市内ではモンシロチョウの数が減っており、それにかわって、モンシロチョウによく似たスジグロシロチョウが目につくようになりました。このチョウは、その名の通り羽にある黒いすじが目立ち、もともと林のへりなど暗い所で生活していました。幼虫は、よく道ばたなどに生えているタネツケバナやイヌガラシなどを食べているので、今後ますますその数が増えるでしょう。

むかしの市川 ～その3～

バチのはなし

昭和30年頃まで、市の南部には稲田や蓮田が海岸まで広がっていました。その間にいくつかの「せき」と呼ばれる水路が通じていました。毎年、10月、11月の大潮の夜、特に月の出ない晩には、このせきの辺りにアセチレンランプを手にした大人やこどもが現れました。暗闇の中でせきの水面をランプで照らすと、白く細長い虫のようなものが泳いでいます。これを目の細かい網ですくいとりまします。たくさん取れると人々はホクホク喜んで家へ帰ります。次の日、これを釣り具店

メスは光があると
緑色になる



イトメ (バチ)

に持っていきとよい値で買い取ってくれるのです。これがバチとって、よい釣り餌なのです。バチはイトメという多毛類が成熟して、産卵のために水中に泳ぎだしたもののなです。自然と密着して暮らしていた人々にとって、バチ取りは楽しい年中行事の一つでした。

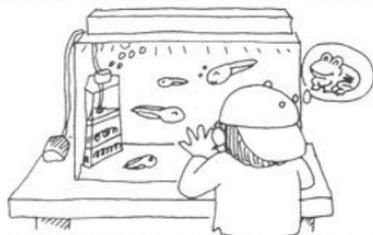
(博物館指導員 玉置善正 記)

大	
町	歳
	時
	記

観察園にも春がやってきました。暖かい日ざしの中、園路を行くと、ウグイスやホオジロのさえずりが響き渡ります。湿地はみるみるうちに、枯れ草色からヨシやクサヨシの新緑の芽生えにおおわれました。ミツガシワやコウホネ、リュウキンカなどの水草が美しい花を咲かせます。園内に多いオランダガラシ(クレソン)の小さな白い花も咲き始めました。クレソンはステーキの“つま”に使われ、栽培用に外国から輸入された帰化植物です。

池や水たまりには、3月の始め頃に生まれたアカガエルやヒキガエルのオタマジャクシがたくさん泳いでいま

す。博物館の情報コーナーでは、水槽を置いて、オタマジャクシが餌を食べ、大きくなっていく様子をじっくり観察できるようにしました。小さな足がはえ、小さなカエルになるのは、いつのことでしょうか。



行徳野鳥観察舎

だより

アカガシラサギ

夕方になると、観察舎前の護岸堤にはゴイサギがずらりと並ぶ。冬は獲物が少ないため餌場の魚のアラをあてにしているのだ。

2月24日のこと、アカガシラサギが1羽護岸堤に止まっているのを見つけた。一見ゴイサギの若鳥を小さくしたような褐色の鳥で翼と尾が白い。当人は白鷺の仲間のつもりらしく、コサギの小群と一緒に飛び立った。下りている時は褐色でゴイサギそっくりなのに飛ぶとまっ白なコサギにまぎれて、見分けられなくなる不思議さが印象的だった。

アカガシラサギは記録がごく少ない珍鳥。千葉県初の繁殖が昨年発見されたばかりだ。1月以来保護区にとどまっている1羽に、お連れが来ないかと楽しみにしている。



ゴイサギ
(若鳥)



アカガシラ
サギ

文と絵・蓮尾純子

展示室より

羊毛に混じってきたもの

かつて市内にあった毛織工場では、外国から多くの原毛を輸入していました。

原毛の中には、羊の放牧地に生育していた植物の種や実、土などがたくさん混じっていました。時には、羊の毛の刈り取りや積み込みの作業をした人々の持ち物や道具まで紛れ込んでおり、原産国でのおおらかな仕事ぶりが想像できます。

羊毛から除かれた植物の種や実、土などは、工場内の一角に捨てられていたため、一部は芽をだして、工場のなかには見慣れない外国の草がたくさん生えていました。

しかし、こうして日本の地に入り込んだ植物も、工場の外まで広まって定着し帰化したものはわずかでした。



こんなものも紛れている！



草木で遊ぼう

スズメノテッポウの笛

春の田んぼ道などに、スズメノテッポウという名の草丈20～30cm位のイネ科の雑草が生えています。ひと株がたくさん分枝し、その先に4～5cmの穂をつけます。この穂が入っている葉鞘（ようしょう）ごとぬきとり、穂をぬいて、葉を下に曲げ、葉鞘を口にくわえて吹くと、ピーッという細い音が出ます。その他、タンポポの花茎でも笛ができます。タンポポの花茎を4～5cmに切って一方をつぶし、つぶした方から吹きます。

